

慰安婦問題

「北」も補償求める

日朝交渉 韓国に同調の方針

【北京30日＝福家康重】

北京での日本と朝鮮民主主義人民共和国(北朝鮮)の第六回国交正常化交渉は初日の三十日、日本側代表団

長の中平立・日朝交渉担当大使の冒頭発言を受けて北

朝鮮側代表団長の田仁徹外務次官も総括的な発言を行った。田次官は本交渉開始

後の日本側の姿勢を「加害者としての反省的立場でなく、過去を覆い隠し歴史的責任から逃れようとする態度だ」と批判。朝鮮人従軍慰安婦問題を取り上げ「この極悪非道な暴行を『合法的』『正当』な行為と置くのだからか」と非難した。田次官はさらに「未成年を含む朝鮮女性を戦場から出して慰安婦とした身

ぶるいすべき行為は当時の日本の法の基づくのか」などと述べ、謝罪と補償を強く求めた。

従軍慰安婦問題は本会談とは別に開いた、大韓航空機事件の金賢姬元死刑囚の日本籍教育係「李恩恵(リ・ウネ)」の消息調査に関する実務者協議でも北朝鮮側は取り上げ、代表団副団

長の李三魯(リ・サムロ)大使が「李恩恵は存在しないが、従軍慰安婦は実際に存在する問題だ。真相を明らかにし、謝罪・補償するよう提起したい」と表明した。日本側は三十一日の会談で従軍慰安婦問題についての見解を述べる予定だ。

北朝鮮の核査察問題について田次官は、中平大使が冒頭発言で、査察実現までの諸手続きの速やかな実施を求めた点をとらえ、北朝鮮の国際原子力機関(IAEA)との間の保障措置(核査察)協定締結を指摘しながら「IAEAとの問題は解決した。(事態が)ここまできて核問題で日本が『あだだ、こうだ』という名分はあるのか」と強い反発を示した。

田次官はまた、これまでの交渉を「足踏み」と表現し、もっと頻繁に会談を開くよう提案した。

双方の冒頭発言のあと、管轄権などに関する「基本問題」の議論に入り、主に一九一〇年の日韓併合条約などの有効性をめぐり双方

が見解を述べ合った。

一方、李恩恵問題の実務者協議は全くの平行線に終わり、北朝鮮側は日本側の李恩恵に関する資料の受け

とりも拒否した。また北朝鮮側は今回で李恩恵についての協議を打ち切りたいと述べたが、日本側は第七回交渉の際も実務者協議を開き、取り上げることを通告した。同協議に日本側からは竹中務省アジア局審議官らが出席した。

【北京30日＝波佐清】

日朝国交正常化交渉の朝鮮民主主義人民共和国(北朝鮮)代表団長の田仁徹外務

次官は三十日夕、北京の北朝鮮大使館での記者会見で、従軍慰安婦問題について「南北が和解、協力、統一の道に進むことで合意したことを念頭に置いてほしい」と述べ、この問題で補償を求める方針を決めた韓国政府と足並みをそろえることを強く示唆。また、「南の人民が要求する通り日本が補償しないといけないのは当然だ」と述べた。

次官は三十日夕、北京の北朝鮮大使館での記者会見で、従軍慰安婦問題について「南北が和解、協力、統一の道に進むことで合意したことを念頭に置いてほしい」と述べ、この問題で補償を求める方針を決めた韓国政府と足並みをそろえることを強く示唆。また、「南の人民が要求する通り日本が補償しないといけないのは当然だ」と述べた。